



療養生活

夫が翻訳した、ポーランドの芸術家ユゼフ・ロバコフスキの映像作品の展覧会が東京で終わったばかり。一方私は油絵やアクリル絵を描くのを一休みしています。絵を描くときに言葉にならない錯綜した気持ちを開放できるのですが、今は手術後なのでむしろやさしい日常生活に戻ることが大事です。

złoto ikony 君戻り
w księżycowej poświacie 眠る月影
maż śpi po pracy 聖画(アイコン)かな
 Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

cisza zapadła 静かなり
tylko kwiat na kampusie キャンパスの花
kwitnie samotnie 独り咲く
 Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

唇に秘めたる力絵踏かな
 春の雪祇園舞子の髪にのる
 春うらら食いけの後の眠けかな

岩見沢市、霜田千代磨

《新会員のひと言》

二風谷アイヌ文化博物館に勤めて

長田 佳宏



日高管内・平取町立二風谷アイヌ文化博物館の長田佳宏と申します。

2019年10～12月に行った特別展「1903年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」では、協会のご後援をいただき、大変お世話になりました。特に11月17日に実施した「講演と映画のつどい」では、協会主催の二風谷ツアーでみなさまに当館の取り組みを見ていただくことができました。

特別展の準備を含め1年以上にわたる会とお付き合いのなかで、私自身、北海道とポーランドの文化交流やさまざまな取り組みをもっと知りたいと思うようになりました。2018年9月に博物館の仕事(アイヌ文化の展示協力)でポーランドの日本美術技術博物館“マンガ”館へ行き、クラクフの歴史と文化を見聞したのも一つのきっかけでした。

また、2019年11月には松本照男さんのご紹介でヴィェスワフ・タイス氏、マレック・シヴィツキ氏を平取町に招へいし、地元のPTA会員に「子どもの権利条約」についてご講演いただくこともできました。そうしたことから、ここ数年ポーランドに関わる深い縁を感じています。

2020年7月には、特別展「1903年夏の平取」の移動展を札幌エルプラザで計画しています。引き続き北海道ポーランド文化協会にお世話になるとともに、今回からは私も一会員として携わらせていただきます。今回の展示は札幌圏の方々に平取町のアイヌ文化をより深く知っていただく機会になると思い、私としても楽しみにしています。今後ともみなさまのお力添えをよろしくお願いいたします。

(おさだ・よしひろ、2020.2 入会)

雪まつりでフォークダンス

小川 真生



雪まつり会場でフォークダンスを踊るのは初めての体験でした。2020年2月8日(土)午後、大通7丁目HBCポーランド広場特設ステージで札幌民族舞踏研究会の一員として踊ったのです。全6曲のうち2曲目「クヤヴィヤクチェルボルネヤブシコ」、3曲目「ククエチカ」、6曲目「ルブリンのポロネーズ」と3曲踊ることになりました。

ポーランドのフォークダンスは衣装も美しく、動きも優美ですから、年末頃からの特別練習も楽しくて、繰り返し練習をして当日に備えました。

「雪は降っても良いけれど、雨や雷は困るわね」などと思っていました。ワクワクして迎えた当日は晴れでした。ワジェンキ公園の水上宮殿とショパン像の前の舞台上、とても晴れがましい気持ちで踊ることができました。床が滑って転びそうでしたが、なんとか持ちこたえて、最後の「ルブリンのポロネーズ」を総勢34名で踊り終えたときは、ホッとしました。

道行く観光客の方がカメラを向けてくれたり、応援に来てくれた友人が声を掛けてくれたり、とてもうれしかったです。皆で笑い合えた、忘れられない一日になりました。(おがわ・まき、2020.2 入会)



親日国ポーランド

鈴木 彰男

毎月購読している『歴史街道』誌のなかに親日国について連載記事があり、親日国の多さに日本人として誇りと感動を覚えました。2014年3月号には〈総力特集〉「シベリアからの奇跡の救出劇～ポーランド孤児を救え」がありました。それまでは漠然と、第二次世界大戦でのドイツ・ソ連の占領下、悲惨な状況におかれ「カティンの森」の悲劇があり、ソ連崩壊後、民主主義国家となり現在に至る程度の認識でしたが、特集を読むと、「ポーランド国民は日本に対し、最も深き尊敬、最も深き感謝、最も温かい友情と愛情を持っている。我々はいつまでも、日本の恩を忘れない…」のだそうです。

—およそ90年前、両国を結び付ける出来事がおこる。ロシア革命と内戦のなかポーランド人は「生き地獄」の苦境に陥る。シベリアでは15万人以上が飢餓や疾病、戦いに巻き込まれ虐殺された。わずかに残る食べ物を全て子供に与えて息絶えた母親。母親に抱きついたまま凍死する幼児たち。そんな悲劇が酷寒の地の随所で起きていた。

外務省の要請を受けた日本赤十字社は即座に救済を決断。三度に渉る救済活動で765人の孤

児を保護し日本に迎えた。その後の日本の対応が素晴らしかった…栄養失調となり、伝染病に罹患した子も多かったが、看護婦をはじめ当時の日本人は子供たちをわが弟妹、我が子、わが家族として温かく接し、慈しみ、恢復させ、孤児たちはその感謝を生涯、忘れることはなかった。「善意の心」から生まれた知られざるポーランドとの友情と信頼がいま私たちに語りかける。

親日国となったもう一つの理由は…日露戦争から友情は始まる。日露戦争当時、ロシアからの独立運動を続けていたポーランド人は大国ロシアに挑む東洋の小国日本の姿に大いに勇気づけられた。日本が仇敵ロシアを破ったことにポーランド人は驚喜し、畏敬の念を抱いたのである。自由を重んじる民主国家ポーランド。領土分割、亡国でもポーランド人は自由と誇りを捨てなかった。

日本とポーランドの国民はなぜ親しい気持ちを持ったのか…遠く離れた二つの国が互いに親近感を覚えたのは、民族の誇り、伝統の尊守、勇気などの価値観を理解しあえたからといわれる。

わが友、ポーランド人に乾杯！

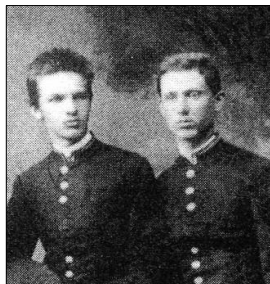
(すずき・あきお、2019.11 入会)

《記念寄稿》

もうひとりのピウスツキ

嵩 文彦

北海道に住む私たちにとって馴染みあるのは、本協会のイベントでなんだか取り上げられている兄のブロニスワフ・ピウスツキ=写真(1885)右=ですが、今回は日本ではあまり知られていない、弟の政治家ユゼフ=写真左=について書いてみます。



彼は兄とともに1887年当時ポーランドを併合していたロシア帝国のアレクサンドル三世暗殺未遂事件に関与したとして、兄はサハリン流刑15年(のち10年に減刑)弟ユゼフはシベリア流刑5年に処せられました。彼はその後ポーランド社会党に入党し非合法活動に従事しますが、逮捕されワルシャワ要塞に監禁されます。そのご脱獄に成功し、日露戦争(1904～05/明治37～38年)の混乱のなか、ポーランドでの武装蜂起計画をたてます。そして日露開戦5カ月後の7月、日本に援助を求めて横浜から入国しますが、日本にとっては極東で直面しているロシアとの戦いが問題であり、遠いポーランドでの独立運動は関心外のことだったのです。

実は、ユゼフ来日の2カ月前の5月に、日本政

府にピウスツキへの協力はしないよう働きかけるため、ドモフスキという政治家が日本を訪れていました。彼はロシア軍内のポーランド人兵士に離脱・投降を呼びかける文書の作成で日本軍に協力し、ロシア人捕虜とポーランド人捕虜の分離収容を約束させ、日露戦争終結後アメリカ移住希望者にはそれを実現させる約束も取り付けました。

ピウスツキとドモフスキは互いの来日を知りませんでした。あるとき偶然出会ってしまいます。二度目に会った時には、二人は9時間におよぶ議論をしたそうです。ドモフスキはポーランドの保守が第一でしたが、ピウスツキはもっと広く世界を見ていました。とうぜん意見は一致せず、その年の7月、別々に帰国の途につきました。

1918年、第一次世界大戦後ようやくポーランドは独立を果たし、ユゼフ・ピウスツキはポーランドの初代国家主席に任命されました。ただ、将来真の敵はドイツになると考えていたドモフスキの「反独」は当たっていました。ポーランドは大国に翻弄され続け、ロシアはソ連(ソビエト社会主義共和国連邦)になって独立国ポーランドを配下におさめ、その崩壊まで圧政をおこないました。(だけ・ふみひこ)